

ラテンアメリカ時事解説

大統領は発信する－日本記者クラブの記者会見

中井 良則

笑顔をふりまかない会見も

常備軍を持たず、安定した民主主義国として知られるコスタリカ。2010年5月、初の女性大統領に就任したラウラ・チンチージャ大統領は2011年12月、公式実務賓客として日本を訪れた。最初の公務のひとつが12月7日、日本記者クラブでの記者会見だった。

やや低い声で、逐語通訳の時間を含め20分ほどスピーチしたあと、出席した約50人の記者の質問に30分ほど答えた。落ち着いて丁寧に説明する。自分の国の立場をはっきり打ち出す。たとえば環境問題を聞かれた時は、こう答えた。

「気候変動問題では先進国の大きな努力はみられません。先進国が約束を守らない限り、温暖化に関して劇的な変化は望めないでしょう。われわれは約束を守るよう努めているのです。それなのに、このままでは、コスタリカのような熱帯の国々は自然災害に見舞われ、気候変動のマイナスの影響を受けることになります」。



「気候変動のマイナスの影響を受けるのはコスタリカだ」と語るチンチージャ・コスタリカ大統領(2011年12月7日、日本記者クラブで) ©日本記者クラブ

気候変動の「被害国」の立場を強調しながら、気候変動への取り組みが遅れている先進国や大国を批判したのだ。一般論や抽象論でお茶を濁さず、世界の中で自国の占める位置をしっかりと押さえ、外国のジャーナリストにわかりやすく語る。そうした説明能力の高さを見せた。

めったに笑顔は見せない。質問した記者が「コスタリカに取材で行ったことがある」と話すと「以前より、はるかに美しい国になっているから、また来てください」と微笑みかけた程度だった。

日本外務省が用意した略歴によると、チンチージャ大統領はアメリカのジョージタウン大学で政治学修士号をとった政治学者。専門は、司法・警察制度改革及び治安対策、という。内務公安大臣や副大統領・法務大臣を歴任し、党内予備選で大統領候補に選ばれ、大統領に当選した。ことばを駆使して相手や選挙民を説得するわざを備えているのだろう。同時に、笑顔をふりまいたりせず、力強さも感じさせる。これらはラテンアメリカで政治家として成功する条件かもしれない。

外国要人などの記者会見 年に200回

公益社団法人・日本記者クラブはチンチージャ大統領の記者会見のように、内外のさまざまな「時の人」をゲストスピーカーに招き記者会見を主催するのが仕事の中心だ。

2011年度の場合、記者会見・昼食会・研究会など呼び方はいくつかあるが、オンザレコードの会見をちょうど200回、行った。クラブの法人会員である報道機関に属する記者や個人会員のジャーナリストが出席し、記事や番組、コラ

ム、ブログなどメディアを通して報道される。日本全国の新聞、放送、通信社、外国メディアなど 126 社が法人会員として加わる。個人会員は賛助会員も含めると約 2,400 人を数える。

日本中の官庁や警察にある記者クラブの総元締めと誤解される場合がある。名称は同じだが、日本記者クラブは出先の記者クラブとは違う。会員が払う会費を主な収入源とし、政府からの援助は受けず、自前で会見施設を備え、独自に会見を主催、運営する民間ジャーナリズム組織だ。

そもそも、日本記者クラブは外国の大統領や首相を迎えて記者会見を開くことを主な目的として 1969 年に設立された。当時、日本のマスメディアには、まとまって記者会見を主催できる横断的な組織はなかった。来日した外国の指導者は外国人特派員の団体である日本外国特派員協会に行き、日本向けの記者会見を行っていた。「日本の報道界として自分たちで外国指導者を招いた会見を開きたい。1970 年の大阪万博には多くの外国トップが来日するから、その前に組織化を急ごう」という声が高まり、新聞・放送・通信社が足並みをそろえ、発足したのが日本記者クラブだ。当初はホテルに間借りして会見を行った。1976 年、新聞各社が協力して東京都千代田区内幸町に日本プレスセンタービルを建設し、日本記者クラブも自分の会見場を持つようになった。

2011 年度の会見では外国からのゲストは 59 人を数えた。大統領は 3 人いたが、そのうち 2 人はラテンアメリカからだ。フアン・マヌエル・サントス・コロンビア大統領とチンチージャ・コスタリカ大統領だ。

この 3 年間、日本記者クラブで会見したラテンアメリカの指導者は別表のようになる（会見の動画は日本記者クラブのホームページ（www.jnpc.or.jp）でアクセスできる）。

日本記者クラブで会見したラテンアメリカの指導者

2009年12月8日	キューバ	ロドリゲス外相
2010年2月2日	メキシコ	カルデロン大統領
2010年9月6日	エクアドル	コレア大統領
2010年10月22日	グアテマラ	コロン大統領
2010年12月8日	ボリビア	モラレス大統領
2011年9月13日	コロンビア	サントス大統領
2011年12月7日	コスタリカ	チンチージャ大統領

ロジの準備は万全だが

記者会見のロジスティック面の準備作業は、大使館や外務省担当課との打ち合わせから始まる。日本記者クラブの目的からいって、来日する各国の大統領、首相、閣僚や国際機関代表の記者会見はできるだけ幅広く行いたい。ただ、最近は東京の滞在期間が短い上、東日本大震災の被災地訪問も日程に入るケースがあり、記者会見の時間を最初から組み込まない例が目立つようだ。せっかく、来日してもプレスを通した日本国民へのメッセージを発信しないまま帰国するのは残念だ。

大使館の幹部にクラブ施設をみてもらったり、さまざまなルートでやりとりして記者会見の日程が固まる。大統領だと、1 週間ほど前に本国から先遣隊が来日し、クラブを下見するのが通例だ。1 階玄関で車を降りるところから、控室での直前の打ち合わせ、会見場への入り方、会見の時間配分、逐語通訳か同時通訳か、終了時の動き方など分単位のスケジュールを先遣隊と調整する。準備万端整えて、当日を迎える。

とはいえ、予定通り本番が進むとは限らない。ラテンアメリカに限らないが、ゲストの個性や忙しさ、前後の日程によって、「あれっ、ちょっと違うな」となることもある。それどころか「まさか」とあわてたこともある。

ドタキャンされて、大あわて

2009 年 4 月 6 日、ベネズエラのウゴ・チャベス大統領をゲストに迎え、記者会見を行う日だった。先遣隊との打ち合わせも無事、おわっ

ていた。その日の朝、大使館から「会見はなくなった」とメールが来た。「そんな、いまさら」と驚き、急いであちこちに電話することになった。本当にキャンセルだった。

私は新聞社で5年間、メキシコ市特派員としてラテンアメリカ各国を取材したことがある。だから、というわけではないが「ドタキャン」の経験は何度もある。とはいえ、新聞社から日本記者クラブに転職してわずか6日後で、ラテンアメリカがらみの初仕事が幻になるとは予想していなかった。実は、チャベス大統領を1階で出迎えた時に、チステ（冗談）で機先を制するんだ、と意気込んでいたのだが、空振りに終わった。キャンセルの理由はいまだによくわからない。



半年遅れで実現したモラレス・ボリビア大統領の記者会見（2010年12月8日、日本記者クラブで） © 日本記者クラブ

もともと、逆に日本側の事情でドタキャンになったこともある。エボ・モラレス・ボリビア大統領は2010年6月9日に記者会見を予定し、会員に案内も出していた。ところが、6月2日、鳩山由紀夫首相が突然、辞任したため、モラレス大統領の来日は中止され、会見もなくなった。ボリビアからみれば、よくわからない理由でドタキャンされたことになる。モラレス大統領の来日は半年後に延期され、クラブでの会見は同年12月8日に実現したのだった。

3本柱は資源・環境・エネルギー

会見の中身はそれこそ、ゲストの個性や状況次第で変わってくる。

2010年2月2日のフェリペ・カルデロン・メキシコ大統領の場合、日本との経済関係や同年12月にメキシコでCOP16が開かれるため環境問題が中心テーマになりそうだった。だが、会見の2日前、メキシコで麻薬組織によるとみられる銃乱射事件が起こり14人が死亡する事件が起こった。大統領にはメキシコから同行した記者もいる。大統領はスピーチの冒頭で、乱射事件を非難し、治安対策の強化を約束した。外交より内政が最大の関心事となったのだ。

モラレス・ボリビア大統領はリチウム資源開発を強調した。ラファエル・コレア・エクアドル大統領（2010年9月6日）はヤスニ国立公園の石油採掘をめぐる環境問題を力説した。資源や環境は日本で注目度が高いことを踏まえている。

チンチージャ・コスタリカ大統領は「電力の90%以上は自然エネルギーでまかなっている」と詳しく説明した。東日本大震災後、日本でエネルギー問題への関心が強まっていることを知っていたのに違いない。

貿易や投資だけでなく、資源・環境・エネルギーの3本柱が、ラテンアメリカに日本が注目する主要テーマではないだろうか。ことばで説得するすべを心得たラテンアメリカの首脳は、日本で発信するメッセージを念入りに用意して日本記者クラブの会見に臨むことだろう。

（なかい よしのり 日本記者クラブ専務理事・事務局長）